

令和4年度自己評価表

【中長期目標(学校ビジョン)】

- 1 主体的に学び、自分の言葉で表現できる生徒を育成する。
- 2 チームで取り組む経験を通し、互いの多様性を知るとともに自己有用感を高める。
- 3 地域連携の主体となり、地域に根ざした学校としての役割を果たす。

【今年度の重点目標】

- 1 授業に集中
 - ① 高校生活や授業におけるマナーの徹底。
 - ② 全教科で公開授業や研究授業を実施するとともに、積極的にALやICTに係る研修に取り組み、生徒の主体的な学びを支援する。
 - ③ 一人一台端末の効果的な活用と、新学習指導要領、特に観点別評価の導入について円滑に対応する。
- 2 行事で団結・部活は熱中
 - ① 本校独自の活動を通して八頭高生としてのアイデンティティを育むとともに、地域から信頼される学校作りを行う。
 - ② 生徒の悩みに的確に対処し、心身の健全な発達を促すとともに、学習との両立を意識した計画的・効率的な部活動運営を行う。
- 3 進路に挑戦
 - ① 基礎学力の確実な定着に取り組むとともに、生徒の習熟度に応じた高い学力の育成を図る。
 - ② 多様な進路に対応しながらも安易に妥協させず高い志望に挑戦させる。
- 4 業務改善
 - ① 慣例となっている行事・会議の見直し。
 - ② 時間外在校等時間の縮小。

	具体的項目	令和4年度当初			評価結果(3月)		
		現状	目標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 授業に集中	高校生活や授業におけるマナーを徹底する。	<ul style="list-style-type: none"> ・98%の生徒が学校で定められたルールやマナーを守るよう心がけている。(生徒がルールやマナーを守っていると評価している保護者の割合は97%、職員の割合は94%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ルールやマナーを守るよう心がけている生徒の割合が98%。 ・現状の校則やマナーを守った上で、生徒の主体的な活動により、校則の意義を考え、必要な見直しが行われる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自律的にルールやマナーを守ろうとする八頭高生の育成を目指し、挨拶の重要性やマナーの遵守について粘り強い指導を行い、様々な機会を捉えて保護者の理解を図るとともに、生徒の自主自律の取組を支援する。 ・学校評価アンケートの結果を分析し、教育活動の改善に生かす。 ・生徒保健委員会生活リズム調査を通年実施し、保護者との連携を図りながらルールづくりを進めるなどしてスマートフォンの長時間利用者の指導を継続する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大半の生徒は爽やかな挨拶ができ、ルールを守る姿勢も良好である。学校評価アンケートでは99%の生徒が「ルールやマナーを守るよう心がけている」と回答した。しかし外部からのマナーに関する苦情が若干増加した。生徒側へ発信はしたが、自分事として捉えられていない可能性がある。 ・今年度一年生からchrome book導入されたが、使用におけるマナー違反やスマートフォン使用規定違反もある。登下校時に歩きスマホやイヤホンを利用する生徒や、現行の校則を守れていない生徒も若干名おり、「自律的」にルールやマナーを守ろうとする姿勢の醸成が必要である。そのためまず校則見直しを行った。生徒会執行部と連携し全生徒にアンケートを実施し、生徒会執行部と指導係職員で協議した案をPTA生活指導委員会にも見ていただき改定案を作成した。 ・生徒保健委員会による生活リズム調査を実施し、委員長・副委員長が結果考察を行った。資料を作成し、保健LHRでの発表や学校保健委員会で報告を行った。スマートフォンの長時間利用者の意識は大幅な改善は見られなかった。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会執行部との連携や生徒生活委員の活用など検討していく。 ・来年度以降、自分達で見直した校則を自分達で守ろうとする姿勢に期待する。規範意識の徹底も図りながら、通信用端末等との向き合い方もしっかり考える投げかけを生活委員の活動として取り組む。 ・生徒保健委員会による生活リズム調査は来年度以降も継続して実施する。学校保健委員会での指導助言をもとに、委員長・副委員長を中心に今後の委員会活動内容等を協議し、活動していく。
	全教科で公開授業や研究授業を実施するとともに、積極的にALやICTに係る研修に取り組み、生徒の主体的な学びを支援する。	<ul style="list-style-type: none"> ・AL9の視点をもとに生徒の活動やICTの活用を積極的に取り入れて、延べ15名の教員が公開・研究授業を実施 ・昨年11月段階で1日あたりの学習時間は1年104分、2年102分、3年146分。1年生で自宅学習時間が2時間以上は31.5%、2年生は36.3%、3年生で3時間以上は39%である。4月調査と比較して23年生は増加している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の自宅学習時間が1、2年生120分、3年生200分 ・教員のICT活用力を向上させ授業に積極的に活用し生徒の理解向上の一助とする。 ・AL9の視点を持って、全教科で公開授業を実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科で年2回(6・10月)に研究授業を実施するとともに、事後の合評会では授業者・参観者の今後の授業改善につなげる ・各教科にICT係を設定し、情報科教諭、ICTアシスタントとともにICTの有効活用について知識を深める ・各教科でスタディサプリの積極的活用を検討し、課題作成や補習の省力化を図るとともに、学習時間確保の一助とする ・定期的に自宅学習調査を実施し、担任等の個人面談を通して学習を支援する 	<ul style="list-style-type: none"> ・10月末までにはほぼ全教科で公開研究授業を実施することができ、教員間で授業改善の情報共有に努めることができた。 ・ICT活用のより一層の促進のための校内職員研修を12月に実施し、職員のスキル向上を図った ・新型コロナウイルス感染予防対策により自宅待機を余儀なくされた生徒に対してリモート授業を全学年で実施した。 ・行事等により授業時間数が予定通り確保できていない科目がある。 ・11月の調査結果では、自宅学習時間が1年92.5(4月比較-7.5)分、2年98.9(-34.1)分、3年151.7(-23.3)分であった。3学年ともに目標値には届かず、4月調査結果の比較においても自宅学習時間の減少が顕著となった。 ・スタディサプリの取組度は3年>2年>1年 ・教員のスタディサプリ閲覧、配信が低下(前年比1/2) ・調査前のスタディサプリ課題配信が昨年より定着化。 ・3年は大学入試対策講座の視聴を積極的に行う生徒が見られた。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・研究授業後の研究協議では、授業改善に向けた十分な協議ができるよう働きかける。 ・授業を効果的にするための活用方法については次年度以降も継続して研修が必要である。 ・授業時間の確保に努める。 ・自宅学習時間については、例年、年度後半に向かって受験前の3年は増加するものの、12年は4月調査よりも減少傾向になるため、LHRや面談等を通して粘り強い指導が必要である。 ・生徒が普段受検する校外実力テストとの親和性を考慮し、令和5年度はclassiに変更し、生徒の学習の利便性と教員の教材作成の省力化を図る。
	一人一台端末の効果的利用と、新学習指導要領、特に観点別評価の導入について円滑に対応する	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年、新学習指導要領による観点別評価、及びchromebookの有効活用に係る校内研修を実施し、理解を深めるとともに、具体的スキルの習得に務めた 	<ul style="list-style-type: none"> ・新学習指導要領に準拠した授業の実践と観点別評価が適切に行われている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業改革研修会を実施し、新学習指導要領の理解を深めるとともに観点別評価のスキルの向上を図る 	<ul style="list-style-type: none"> ・観点別評価に関しては、暫定的な方法で実施しているものの、より良い評価方法の実施に向けて、情報収集と研修が必要であった。 	D	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の評価方法を検討し、次年度の評価の実施につなげる。

	具体的項目	令和4年度当初			評価結果(3月)		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
2 行事で団結・部活は熱中	本校独自の活動を通して八頭高生としてのアイデンティティを育み、地域から信頼される学校作りを行う。	<ul style="list-style-type: none"> 八頭高愛し愛され運動を6月と11月の2回実施した。6月は、生徒265名が参加し、約35.3%の参加率、11月は、生徒241名が参加し、約32.2%の参加率となった。2回ともコロナ禍にも関わらず、多くの生徒が参加した。各回ともに目標の参加率30%以上を達成した。 思考力や実行力、地域理解の深まり等に関して、肯定的な意見「はい」「どちらかというとはい」は90%を超えている 	<ul style="list-style-type: none"> 八頭高愛し愛され運動への参加者が各回とも全校生徒の30%以上 生徒会から積極的に意見を発信し、校則の見直しに参画する。 探究活動をおとした思考力や実行力の向上に関して、肯定的な意見(「はい」と回答する生徒)の割合が60%以上 探究活動(2・3年生)をおとした地域理解の深まりに関して肯定的な意見(「はい」と回答する生徒)の割合が70%以上 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会執行部の全校生徒への呼びかけ方を工夫し、さらに参加者の増加を目指したい。 生徒会活動の活性化を支援し自主自律の取組を促す。 探究活動のプログラムの充実を図り、生徒が主体的に行動できる教材を開発する。 地域の理解を深めるため、キャリアパスポートの活用を充実させる。また、地域へのフィールドワークや活動内容の発信をおして、地域とのつながりを強化させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 6月に実施した「第1回愛し愛され運動」には、346名の生徒が参加し(全校生徒728名の約45.6%)、目標の30%を大きく上回った。また、10月に実施した第2回では1、2年生生徒数485名のうち198名が参加し、約40.8%の参加率となった。 3年ぶりに開催した1月の「八頭高ライフ体験」には、八頭郡内の3つの中学校から151名の中学2年生、教員18名の教員が参加した。地域の中学校と久しぶりに連携することができた。 探究活動のプログラムの改良を継続的に行っている。2年翠陵探究の鳥取大学連携、企業連携、八頭町議会連携を実施。 第2回アンケート(12月)において、思考力等の向上意識の割合「はい」44.6%(R4_1回/48.3%, R3_2回/36.7%)、地域理解の深まりの意識の割合「はい」53.6%(R4_1回/54.5%, R3_2回/43.9%)。 総合発表会を開催し、3年生は下級生に対してこれまでの成果を伝えることができた。 3年探究チームの数チームは八頭町内の小中学校を訪問し、成果発表や交流会を実施した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 「愛し愛され運動」は本校地域連携の一つの形として来年度も積極的に参加を呼び掛けたい。 来年度も「八頭高ライフ体験」をはじめとする中学校との連携を強めていきたい。 探究活動を主体的な活動とするためのプログラム開発は今後も検討が必要。生徒の興味関心を引き出す資料づくりや指導者のスキルアップを図るための情報提供、また育成したい生徒像の共通理解を今後なお一層充実させる。 生徒が主体性を持ち、思考力や実行力を向上させるために、職員研修等を通して探究活動での支援の在り方を充実させる。また、翠陵探究では、大学、企業、八頭町議会との連携で外部の方との接触がある。このような取り組みを充実させることで、地域理解の深まりを促進する。 キャリアパスポートのより有効な活用についても引き続き検討し、ふるさとキャリア教育を充実させる。
	生徒の悩みに的確に対処し、心身の健全な発達を促すとともに、学習との両立を意識した計画的・効率的な部活動運営を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 87%の生徒(保護者78%)は、八頭高は心身の悩みに関わる相談について適切に対処していると考えている。 昨年度全国大会出場者ホッケー(男子・女子)、陸上競技、卓球、柔道、書道、放送、バレーボール(全国選抜チーム代表)、歴史研究同好会、ビブリオバトル 合計67名 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の心身の悩みに適切に対処していると回答する生徒の割合が85%、保護者の割合が80% 学習と部活動の両立に向けて努力している生徒の割合が60% 全国大会に出場した生徒数が80人 	<ul style="list-style-type: none"> 日々の生徒観察や声かけ、hyper-QUの分析・検討会、個別面談、教育相談・特別支援委員会、教育相談係・保健係連絡会、人権教育LHR等を通して生徒の悩みを把握する。 教職員同士がコミュニケーションを密に取り合い、保護者との連携も図りながら生徒が安心して充実した学校生活を送れるよう指導・支援する。 各々が全国大会出場を目指し、生徒も指導者も日々の取り組みを継続し、目標80名を達成したい。 	<ul style="list-style-type: none"> いじめアンケートを2回、Hyper-QU調査を2回実施し(1、2年生を対象、2年生は1回)、悩みを抱えている生徒について情報共有を行った。人間関係のこじれなど少なからずストレスはあると思われるがアンケートへの記載がほとんどなく、実施方法の検討が必要。 人権教育LHRは4回実施し、その後の人権教育推進委員の意見集約などを通して生徒の悩みや要望も把握した。 学校評価アンケートでは94%の生徒が「いじめや差別を許さない実践力を育成している」95%の生徒が「安全に配慮して教育活動をしている」86%の生徒が「心身の悩みに関わる相談について適切に対処している」と回答している。 支援を必要とする生徒については、学年団、教育相談係、各教科担当者と情報共有し、必要に応じて個別の対応をとるとともに、適宜、保護者面談やケース会議を実施した。 部活動に所属する生徒のうち、学業と両立できていると考えている生徒は40%、あまりできていない、全くできていない生徒が18.9% 全国大会出場者については、以下の87名が出場。 ホッケー男子 のべ33名 ホッケー女子 18名 卓球 1名 柔道 のべ5名 放送 のべ11名 駅伝男子 10名 亀の会(歴史研究同好会) 9名 	B	<ul style="list-style-type: none"> 来年度もいじめアンケート、Hyper-QU、人権教育LHR等を通して生徒把握や情報共有を行うとともに、日頃から生徒をよく観察しながら生徒の悩みに適切な対応ができるよう職員間や保護者との連携を強化していく。 新型コロナの5類移行後も引き続き精神的ケアをはじめ、心身の健康を第一に考えた生徒支援を心がけていく。 支援を必要とする生徒に対しては、校内での情報共有をはじめ、引き続き外部機関との連携を深めるような支援体制を充実させていく。 教務内規の見直しにより、履修認定の条件が事実上緩和されたが、生徒への対応が緩むことのないよう適切な指導を行う。 八頭高等学校部活動等に係る方針を遵守し、活動の活性化とともに、生徒の家庭学習時間が確保できるよう定期的に確認する。

	具体的項目	令和4年度当初			評価結果(3月)		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
3 進路に挑戦	基礎学力の確実な定着に取り組むとともに、生徒の習熟度に応じた高い学力の育成を図る。	・進路を実現するために目標に向かって努力している生徒は、1年74%、2年85%、3年94%であった。(11月調査)	・進路実現に向けて努力している生徒の割合が1年生75%、2年生85%、3年生95%	・進路指導のための事業や、各類型、各分掌及び学年等の諸行事について、その意図・意義を生徒にしっかり理解させ実施することにより、視野を広げ、キャリアデザインにつなげていく。 ・キャリア教育全体計画に基づき、キャリア設計講演会、「大学生に聞く」講演会、長期休業中補習、勉強合宿、土曜自習・質問教室などの活動を通して進路選択と学力向上を図り、進路実現をより確かなものにしていく。	・学校評価アンケートでは、進路実現のために目標へ向かって努力している生徒は全体で87%であり、数値目標はほぼ達成された。 ・コロナ禍の影響による変更はあったが、進路指導に関する行事についてはほぼ実施することができた。また、3年生の補習のあり方を改善するなど、進学に向けた学力向上の取り組みを行うことができた。 ・3年生の補習、二次向け補講については多くの生徒が受講し、国公立大学をはじめ、大学受験等に向かうことができた。 ・総合型・学校推薦型入試に向けての個別指導について、組織的に取り組むことができた。	C	・進路 LHR については学年ごとに目標を設定しながら実施していただいているが、1年間の計画をしっかりと立てた上で4月からスタートできるようにしたい。また、大学研究や進路情報に浮いてしっかり取り組むように促していきたい。 ・学力の3要素のうち、思考力・判断力・表現力、加えて読解力を伸ばすことができる授業へと改善していくことで、大学入試に耐えうるだけの学力を習得できるようにしなければならない。 ・難関大を目指す生徒が少しずつ増加してきているが、それらの生徒を学校として把握し、進路検討会の実施や過去問添削指導などの個別対応に組織的に取り組む必要がある。
	多様な進路に対応しながらも安易に妥協させず高い志望に挑戦させる。	・国公立大学志願者(10月調査)は、1年121名(4月107名)、2年124名(1年4月131名)、3年107名(1年4月124名)であった。大学入学共通テスト受験者は131名(探究・総合コースの57.7%)であり、前年比1名増であった。国公立大学合格者数は58名、うち現役生は49名。前年比20名増であった。	・国公立大学の現役合格者数が50人 ・大学入学共通テストの受験者数が150人	・生徒との個別面談等とおして、1、2年生は進路志望の確立とその実現に向けてなすべきことを強く意識させ、目標に向けて自律的に行動できる態度を育成するとともに、3年生は決定した希望進路の実現に努める。 ・大学・学部・学問研究の充実によって、将来のキャリアを見据えた上で何を学ぶべきかを考えさせ、具体的な進路目標に向けて努力する態度を育成する。	・進路志望調査(10月)による国公立大学志望者は1年120名(49.6%)、2年111名(51.5%)、3年99名(40.7%)であった。4月の調査と比較すると1年では2人増加、2年では4名増加、3年では9名減少だった。4年制大学志望者全体は1年154名(63.6%)、2年186名(76.5%)、3年159名(65.4%)であった。専門学校志望者は医療・看護系志望者を中心に1年45名(18.6%)、2年32名(13.2%)、3年54名(22.2%)であった。1、2年は4年制大学を志望する生徒の割合が増加しているが3年生はやや減少している。国公立大学志望者がやや例年より減少している。進路指導やしかりとした学力の修得によって志望を維持していかなければならない。 ・共通テストの出願は132名(全生徒の54.3%)であった。国公立大学の現役合格者数は3月22日時点で43名。	C	・鳥取大学や公立鳥取環境大学などの地元にある大学と連携した行事を積極的に実施し、志望者の増加に継続的に取り組む。 ・進路指導室・生徒自習室周辺のW i f i 環境が整備されたので、生徒自身の大学・学問研究の一層の充実はかり、入試の過去問などに触れさせる取り組みが必要。 ・小論文や面接指導のための協力体制が個人レベルでしかできておらず、指導スキルの向上やノウハウ、模範解答などの蓄積のための研究会を作る必要がある。 ・各類型が進路目標とカリキュラムポリシーを作成し、それらに基づいて進路LHR等を効果的に計画していく必要がある。 ・難関大志望者に対する進路検討会を昨年度より始めたが、今年度も継続し、組織的な取り組みを強化していく必要がある。
4 業務改善	類型制完成年度となることから、慣例となっている行事、会議等を見直し、所要の改善を行うとともに、時間外在校等時間の縮減に取り組む。	・令和3年度の時間外在校等時間が月45時間を超えた者は平均7.8人、年間360時間を超えた者は17人。 ・令和3年度の年次有給休暇取得状況は1人あたり平均13日1時間。 ・毎月の部活動実施計画は適正な時間で計画されている。 ・時間外在校等時間の多い教職員には、毎月の時間外在校等時間について個票を渡し注意を促した。	・会議が短時間で効率よく行われている。 ・時間外在校等時間が月45時間を超える者が月平均5人(全職員の8%)以下、年360時間を超える者が10人(全職員の15%)以下。 ・年次有給休暇取得が1人平均14日。	・学期単位で教育活動の見直しを行い可能な内容は年度途中からでも改善する。 ・掲示板等による情報共有を有効に活用。 ・ICTを活用し、業務効率化を推進 ・時間外在校等時間の多い教職員には、毎月の時間外在校等時間について個票を渡し、縮減に向けた意識喚起をする。 ・帰らーDAYの設定と運用 ・夏季休業期間中に対外業務停止日を設定する。 ・全部活動が「鳥取県立八頭高等学校部活動に係る方針」を遵守する。 ・部活動実施計画、実施報告の確認	・生徒保護者からの遅刻、欠席等の連絡をオンラインで報告できるようなシステムを作成、2学期から運用を開始。朝の電話連絡が0になるわけではないが、オンラインによる報告システムにより絶対数は減少した。 ・2月末までの11ヶ月間で、時間外在校等時間が月45時間を超える者が月平均10人、年360時間を超える者が11人。月の時間外在校等時間が30時間を超えた職員には主な業務内容や4月以降の月別時間外在校等時間を一覧にした表を配布して注意喚起。 ・3月15日時点の年次有給休暇取得は13日0.8時間。対外業務停止日、体験的学習活動等休業日はそれぞれ90%超が休暇、振替等をあてて有効に活用された。 ・帰らーDAYは設定しなかった。	D	・新年度も年度当初に周知し、利用の促進を図る。 ・時間外在校等時間の縮減に努める。月ごとの職員への注意喚起を継続。 ・対外業務停止日の設定、年次有給休暇の取得目標の設定、週休日振替の徹底等の取り組みは継続。 ・教員業務支援員への業務依頼をシステム化。

評価基準 A：十分達成 [90%] B：概ね達成 [80%程度] C：変化の兆し [60%程度] D：まだ不十分 [40%程度] E：目標・方策の見直し [30%以下]